やはり俺の青春ラブコメにこんなにヒロインがいるのは間違っている。

とまとと

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

比企谷八幡とのいろいろなヒロインの出会いを短編集のような感じで載せていきたいと思います！

比企谷八幡のこんな世界もあるかもしれないというそれぞれのヒロインとの物語です！どうぞ！

目　次

城廻先輩との2度目の出会い ―― 1
城廻めぐりは意外と押しが強い？ ―― 6
城廻めぐり先輩との初デート？そして・・・ ―― 10
仮面の下は・・・上 ―― 16
仮面の下は・・・中？ ―― 22
仮面の下は・・・下 ―― 27
川崎沙希の初恋はやはり間違っている ―― 36
鶴の想い人　1 ―― 40

城廻先輩との2度目の出会い

「やっほ～比企谷君久しぶりだね！」

「城廻先輩??お久しぶりです
今日はどうしてこんなところへ？」

土曜日のお昼、たまたま学校の帰りに見つけた人通りの少ない公園で本を読んでいた時に城廻先輩と一年ぶりの再会を果たしたのだった

「今日はね学校もお休みだし、お散歩でもしようかな～って！ここね、私が小さい頃からよく来てたとこなんだ～！」

城廻先輩はどこか懐かしそうにしかしほんの少し寂しそうな表情をしていた。

「そうだったんですか、いつもは家で読んでるんですけどね、これだけ涼しくて天気がいい日にはたまにはこーいうところで本を読むのもいいかなって」

「うんうん！なんかいいと思う!!
・・・あの、比企谷君??」

「どうしたんですか??城廻先輩？」

「あの時はほんとにごめんね？」

あの時？あの時っていつなんだ??
そもそも城廻先輩に謝られるようなことをした覚えは無い。
はっ、まさか無意識のうちにほんわかめぐりんパワーにやられて告白していたとか!?・・・充分ありえる、これでまた新たな黒歴史が・・・

と悶えていると

「えーと、なんていうか・・・

ほら、前にね？私比企谷君にさいてーって言っちゃったじゃない??」

「あー、あれはホントのことなんで全然気にしなくていいですよ？」

良かった～、めぐりんパワーにやられて告白とかしてなくて、危ない危ないこれ以上の黒歴史には耐えられないからな～と思っていると

「ううん、違うの、どうしてあんな事をする人の周りにね、一色さんや雪ノ下さん、由比ヶ浜さんみたいな素敵な女の子がいるのかなーって気になってたの

それである日ね、はるさんに聞いてみたんだ～」

「あー、比企谷君？比企谷君はね、めぐりが思ってるような子じゃないよ？

あの子はね、自分を犠牲にしてね、物事を解決しようとしてるんだ、それで結果自分が悪者になって、そしてめぐりみたいに皆勘違いしちゃうんだ～

それにね？比企谷君は自分が犠牲になってるなんて思っても無いんだよ？それが当たり前になってるの

それでね、自分の近くにいる人も傷付けちゃうの、そしてそんな自分にまた傷付くの比企谷君・・・

私はもう少し比企谷君のことを知ってくれる人が増えてもいいと思ってるんだ～。

だからめぐりもね？今度比企谷君に会うことがあれば少し比企谷君の本質を見てあげて」

「ってね！」

「・・・俺は犠牲になんかなって無いですよ。
それが当たり前なんです、誰も傷つかない世界の為には・・・」

「ダメだよ?・比企谷君、誰も傷つかない世界?・
まず一番比企谷君が傷ついてるじゃない。
あの時は上辺しか見てなかった私が自分で許せない
比企谷君はこんな悲しそうな顔してるのに・・・
なんであの時は気づくこと出来なかったのかな・・・」

「それが当たり前なんですよ。
だから城廻先輩が気に病むことなんて何も無いんです。」

「・・・ダメ、ダメだよ・・・、比企谷君・・・
私はもう知っちゃったんだもん!・比企谷君のこと!
今更見て見ないフリはできない!」

「でもそうするしかないんです。」
俺は犠牲になんてなっていない。これがこの世界の普通なんだ。
だから俺のしたことは間違っていない。
これで誰も傷つかないんだ、
・・・でもほんとにそうなのか、俺はたくさんの人を傷つけた、小町に雪ノ下、由比ヶ浜、俺はこんなに近くの人を傷つけてしまった。
俺はこのやり方を、やめなければいけないことには気づいてる、だがどうすればいい、他のやり方がわからない。わからないからこれであっていると思いたいだけなんだ、それなのに城廻先輩はそんなこと見透かしているような顔で俺に伝えてくる。
自分でも変えたいとは思っている、あとはキッカケなんだ。

「・・・っスンッ、うっ、」

「!?なんで城廻先輩が泣いてるんですか!?」

「私は・・・私が許せない・・・
比企谷君、自分でも気付いてるんだよね？」

「・・・はい」

「これからはさ、少しずつでも私と変えていこうね？」

「・・・はい」
この時の城廻先輩の笑顔にドキッとしてしまった俺は不謹慎なのだろうか、自分のために泣いてくれる女の子を傷付けたくないと思った俺は城廻先輩と変わっていくことを決意した。

「とりあえず比企谷君！
連絡先交換しよ！」

俺はケータイを取り出し城廻先輩に手渡し

「登録お願いします」

「えっ、ケータイそんな人にすぐ渡せるんだ・・・
フフッ」

「どうしたんです??」

「いや、お父さん以外の男の人の連絡先しったのこれが初めてだから！」

「っ！そうなんですか・・・」
自分でも顔が赤くなっていることはすぐ気付くことができた

「比企谷君顔が真っ赤だよ？」

そう言って城廻先輩は微笑む

「そーいう城廻先輩こそ顔が赤いですよ」

「えっ!?そっ、そんなことないよ～？アハハ・・・

ところで次からはめぐり先輩って呼んでね！

比企谷君！」

「嫌ですよ」

「ダメかなぁ？」

そんな捨てられた子犬みたいな顔をされたら断れないじゃないですか・・・

「わかりました、めぐり先輩よろしくお願いします。」

こうして比企谷八幡と城廻めぐりの２度目の出会いが始まったのであった

・・・ところでめぐり先輩は比企谷君のままなんだな。

城廻めぐりは意外と押しが強い？

ピロリーン

夜、リビングでテレビを見ているとケータイが鳴った。
どうせいつもの迷惑メールかＡ○ａｚｏｎだろうと暫く放置していると、ヴゥー、ヴゥー、と電話がなり始めた。
めんどくさいな～と思っていると１度切れたので、あぁ、やっと切れたかまたテレビを見ようとした時またなり始めなのだ、これは出た方が楽だなと思い、ケータイの画面を見るとそこにはめぐりんの文字が。
あの人自分で自分をめぐりんで登録したのか・・・まぁ、由比ヶ浜よりかはずいぶんと可愛らしいが

っと、こんなことを考えているよりも早く電話にてなくては！とケータイを手に取り

「もしもし？めぐり先輩？どうしたんですか??」

『もー！比企谷君電話にでるの遅いよ！
待ってる時どれだけ私が緊張したと思ってるの！』

「すみません、あれがあれで忙しくて」
適当な嘘を言っていると

『あっ、そうだったの!?大丈夫？電話できる？
忙しいならまた後でかけなおそうか??』
本気で心配してくれているめぐり先輩に俺はなんてことをしたんだろう。
「いえ、もう終わったんで大丈夫ですよ」

『あぁ、そうなんだ！
あのねっ！明日のお昼過ぎにまたあの場所散歩したいな～っね思ってるの！
比企谷君も大丈夫だよね？』

「えっ、明日ですか？んー、そうですね～」
どう答えようか迷っていると、

『あ～、比企谷君が来てくれるまでずっとお散歩してよ～っと！でもなぁ、来てくれないとずっと1人でお散歩か～、危ないな～、誰か一緒に来てくれないかな～』

ずる過ぎますよめぐり先輩・・・

「わかりました明日の何時くらいですか？」

『わっ！ありがと！1時くらいかな！
来てくれると思わなかったよ～！
やっぱり優しいんだね、比企谷君！』

「いやいや、あんなこと言われたら断れないじゃないですか」

『あっれ！そうかな??フフッでも嬉しいよ？』
まるでイタズラが成功した子供のように笑っているめぐり先輩に対してあぁ、こーゆうのも悪くないな、と思う八幡であった。

そして、電話を切り先ほどのメールを確認してみると

☒やっほー！比企谷君！
これが初めてのメールだね！とっても緊張したよ～
私今まで男の子とメールなんでしたこと無かったからなんて書け

ばいいかわからなくて何度も書き直しちゃった！でもやっぱり伝えたいことは書くね??

私ね、今日すっごく嬉しかったの！

今まで知ることの出来なかった比企谷君を知れて、とってもドキドキしたの、一色さんに、雪ノ下さん、由比ヶ浜があなたを信頼している気持ちよくわかったんだ～

そして、あなたに信頼されてる皆がとっても羨ましくなったの、私ね？これはすっごく意外だって言われるんだけど、欲しいものがあったら全力で手に入れに行くんだよ??だからね、比企谷君、覚悟しててね？

まだ誰も手に入れてないあなたの本物、私が必ず手に入れるからね！☒

こんなの告白じゃないですか？とても胸がバクバクしている、めぐり先輩なら素でこの文を書きそうではあるがそれでもどうしても期待してしまう、めぐり先輩は一緒に変わろうと言ってくれた、だから俺は変わると決めたんだ。俺のこの気持ちは決して偽物では無いだろう、明日めぐり先輩に会うのが楽しみだなぁ、と思う八幡であった。

その頃のめぐりは、

はわ～、言っちゃった言っちゃった！恥ずかしい～！

これで私の気持ち伝わっちゃったよね？でも比企谷君なら気づいても誤魔化してそうかな～

でも私ったらなにいっちゃったんだろ・・・

でも、こんな気持ちになったのは初めてだから、だから適当にはしたくないんだ。最近までは最低だと思ってたのに、人の話を聞いて、ホントのことを知り見方が変わっただけでこんなすぐに気持ちは変わっちゃうんだ、そ～ゆうことを知れたってだけでも私はとても幸せだ

だから私は絶対に手に入れる、生まれて初めてのこの気持ちも、自

分を傷つけちゃう比企谷君をすぐそばで助けてあげることができるように、彼の隣にずっと立っていたい。そう、これが私の初めての恋心だ

城廻めぐり先輩との初デート?そして・・・

今日は待ちに待った比企谷君との初デート!
今日着ていく服も部屋中の服を並べて、合わせて、姿見の前で確認して選んだし、お気に入りの本もバックに入れたし、髪の毛も整えたし、なによりも普段ほとんどしないメイクを少しいつもよりしっかりした。
まぁ、服を選ぶのに2時間かかったり、メイクも1時間かけてしまったことでお母さんにニヤニヤされちゃったり、家を出るときに今度紹介してね!と、満面の笑みで言われちゃったりしたんだけど・・・
でも、私はお母さんに比企谷君のことしっかり紹介したいなって思ってるんだ!
あんなに人のことを考えれる人は他にはいないから。

待ち合わせの時間よりも1時間も前に公園についてしまった私は比企谷君が来るまで何してようかな~と思い考えついたのが、前に比企谷君が本を読んでた場所で私も本を読んで待っていようというものだった。
しかし、既にその場所には、

「ひっ、比企谷君!?なんでもういるの!?」

「っ、めぐり先輩!?
いや、待ってる時間することがなかったので早めに来て本でも読んで待ってようかなって思いまして。
めぐり先輩もどうして?」

「私も早く準備終わっちゃって先にここで本を読んでようって思って来たんだ~
ふふっ、私達同じだね。なんか嬉しいな♪」
比企谷君も楽しみにしてくれてたのかな??

そうだったら嬉しいなぁ♪
でも、小町ちゃんに言われて仕方なくとかだったら悲しいな。

「っ、そ、そうですね。」
っべー、めぐり先輩マジやっべー俺が戸部化しちゃうくらいにやっべーわ。
ほんわかめぐりッシュされてくのがわかる。
あぁ、これは小町に次ぐ俺の癒し効果だ。
てか、嬉しいなとかヤバすぎるでしょ、こないだのことがあって意識してしまってるのにこれはヤバイ。
なので自分にこう言い聞かせる、めぐり先輩は特に深く考えてこれを言っている訳では無い、俺が考えすぎているだけだ、勘違いするな。
こう考えることで自分の中で上がってくるなにかが、スーっと落ちてくのがわかる。

「それじゃあ、少し早いけどお散歩しよう!!」
あれ？一瞬比企谷君が照れたと思ったのにすぐにいつも道理になっちゃった、私の勘違いなのかな？
でも、今日は少し覚悟をしてきたんだもん、こんなところで変に諦めるようなことはしたくない。

「そうですね、行きましょう」

「比企谷君はさ、大学とかどうするのかな??」

「そうですね・・・国立文系のところに行きたいかなとは考えてるんですけど・・・」

「っ!それじゃあ!それじゃあ!わたしの行ってる○○大学とかどうかな??
レベルもそんな低くないし、楽しいよ!

私も一緒に行けたら嬉しいし！」

「そうですね、同じ所行けたら嬉しいですね。」
って、俺はなんてことをいったんだ!?
こんなことを言ったらドン引きされるじゃねーか・・・

「だよねだよね!!どうかな??」
やったやった!!比企谷君が私と同じ大学で嬉しいって言ってくれた!!
これって脈ありってことかな??
そうだと嬉しいな！

「平塚先生からのオススメ国立文系の中にもありましたし、ちょっと相談してみたいと思います。
なによりも、家を出なくていいし、そんなに遠くないっていうところがいいですよね。」

「まぁ、そうだけど・・・」
なに!?比企谷君ったら同じ大学がいいとかじゃなくて、家から近いからいいですねって言ったの!?これじゃ嬉しがった私がバカみたいじゃん！少し意地悪をしてやろう。

「どうしたんですか？」
少し落ち込んだようなめぐり先輩を見てこう問いかけると

「私と同じ大学だからいいですねって言ったわけじゃ無いんだ。家から近ければいいんだ。ふーん、しーらないっ！」
少しムッとなっちゃってこう言ったけど子供っぽかったかな??でもホントのことだもーん！

「ふふっ、めぐり先輩も子供っぽいとこありますよね。

でも、めぐり先輩、人を勘違いさせるようなことそんなに言わない方がいいですよ??」
そう、これが一番心配なところだ、こんなことを誰にでも言って、勘違いされて、めぐり先輩が怖い思いをする、これは俺が絶対にさせたくないことだった。
するとめぐり先輩はキョトンとした顔で
「こんなの好きな人以外にするわけないじゃん！」
と、顔が真っ赤にしながらプンプンと怒ってきた。
それを聞いて良かった、好きな人だけなら大丈夫だろうと。あれ？好きな人にしか言わない？なんで俺に言ったんだ？深く考えるな、勘違いするな、これもめぐり先輩の天然からくるものだ。そう言い聞かせようとする。
「こんなの好きな人以外にするわけないじゃん！」
えっ、勢いに任せて私はなんでことを言ってしまったのだろう、これはもう手遅れだ、私は流れで比企谷君に告白してしまったのだ。どうしようどうしようと頭の中で必死に考える。そこでふと頭によぎったのは、比企谷君がこれを本心じゃないととらえてしまうことだ。それだけは何をしても阻止したい、そこで私は覚悟を決めたのだった。
「比企谷君、今君は勘違いするなとか自分に言い聞かせてると思うんだけど、勘違いじゃないよ。
私は比企谷君が好き。だからあの時の私を、比企谷君を理解することができなかった、上部しか見てこなかった私を許さない。でもね、こんな私を許すことができるとしたらね、比企谷君だけなんだ。私はね、比企谷君が思ってるほどいい子でもないし、自分のことばっかり考えてるんだ。でも、それを表に出さないようにしてきただけなんだ。でもこのわがままだけは表に出させてもらうよ。比企谷君、大好きです！私と付き合ってくだひゃい！」

うっわ～！なんで一番大事なとこで噛んじゃったんだよ!!その前まで言えてたのに!!比企谷君も固まってるし!!どうしよう!?帰られちゃうよかな!?そう心配していると。

「めぐり先輩、俺は今まで人を信用することが出来ませんでした。信用し、裏切られることだけを考えて、そんなことを考える自分が嫌で、だから最初からそう割り切ってしまえばいいって、でもめぐり先輩がその殻を壊してくれたのは本当です。一緒に変わってこうって言ってくれて、俺は本当に救われました。でも、俺が今めぐり先輩に抱いてる気持ちが本物なのかがわからないんです。ただ勝手な自分の理想をめぐり先輩に押し付けてるだけかもしれません。ただめぐり先輩に依存してるだけかもしれません。こんなのは本物と呼べないと思うんです。だから・・・俺は・・・・・」

「比企谷君、それでもいいんだよ。本物なんて誰にもわかんない。でもね、本物って気づいたらなってるものだと思うの。だからこれから私が比企谷君の本物になるために頑張るから、それをね、一番近くで見てて欲しいの。他の誰でもない比企谷君に、そしたら私、頑張れるから。絶対に後悔はさせない、比企谷君がなにか考える時には私のことが出てくるように頑張るから。だからこんな私ですけど良かったら付き合って欲しいと思うんだ。・・・・・・だめ、かな・・・？」

これが紛れもない私の本心だ。嘘偽りのないホントの気持ち、これが届かなかったら一生届かないだろうというくらいの本気の本気、これでダメだったらはるさんに慰めて貰おう、私の一生一代のこの勇気とその結果を

「めぐり先輩、今ので少しは自分の気持ちを信じることがてきました。俺はめぐり先輩を守りたいです。めぐり先輩にはいつも笑顔でいて欲しいです。そしてその近くに自分がいることができたらとても嬉

しいと思います。だから、その、えっと・・・よ、よろしくお願いしましゅ・・・」
くっそ、なんで最後に噛むんだよ、くっそ恥ずかしいわ・・・めぐり先輩もはやくなんか言ってくれ・・・

「めぐり」

「えっ？」

「めぐりって言って？」

「め、めぐり・・・」
うっわ、めっちゃ恥ずかしい・・・

「比企谷君！ううん、八幡君！不束者でございますがこれから末永くよろしくお願いします！」
産まれてから一番の笑みを八幡君に向ける。
すると八幡君は恥ずかしそうに頭を掻きながら。
俺の方こそよろしくお願いしますと一言。
ふふっと自然に笑がこぼれる。

あぁ、これが幸せってことなんだなぁ。

仮面の下は・・・上

「ふぅ～」

今日も1日つまらない。無駄な1日だったな。

最近は毎日そう思う。雪ノ下グループの仕事をさせてもらうのはいい、自分の将来のためになるから。しかしその後のお偉い方との食事会、ましてやその子供達とさせられるお見合いなんてものは苦痛でしか無かった。

しかし私はそれを嫌と言える立場に無いこともわかっている。なので、自慢の仮面をいつもかぶっている。この仮面を取ることができるのは1人の時だけ。だがふと頭をよぎったのは

「あっ、そっか、比企谷君だけは一目でこの仮面に気付いたんだったか。」

最近お気に入りの喫茶店でコーヒーを飲みながらぼんやりしていると、まだ私が楽しかったと思えた時の思い出が脳裏に蘇る。

初めて会ったときから私の仮面に気づいてくれた比企谷君、雪乃ちゃんを変えてくれた比企谷君、隼人をつまらないおもちゃだと改めて理解することができたのも比企谷君のおかげ。うん、認めようかな、私はあの時比企谷君をただのお気に入りだと思っていたけどそうじゃなかった。きっと彼に少なくともお気に入り以上の好意を向けていたのだろう。そのことに離れてから気づくなんて私もまだまだだなぁ。

あぁ、比企谷君は今どこでなにをしているのだろう。

とても気になっているが自分から連絡しようとは思えない。こんなにつまらなくなった私を見て彼はなんて言うだろう、それがたまらなく怖い。私がこんなことを思うなんてほんと彼ぐらいだろう。

はぁ、明日もまたお見合いかぁ、と一息つき喫茶店を後にするのだった。

「今日はお日柄もよく、わざわざお越しいただきありがとうございます。」
今日も仮面を張り付けて挨拶をしていく。
あぁ、昨日彼のことを思い出してしまってからとても憂鬱だ。もうなにを聞かれても思うことは⊠つまらない⊠
この一言だった。
ぱっぱとお見合いを終わらせて、あのお気に入りの喫茶店へと向かう。

カランカラーン
扉が開くとなるこの音も心地よい、お客がそんなにいないのもお気に入りの理由の一つだ。

「マスター、いつものおねがい。」
カウンター席に座りそう声をかけると、

「すみません、今はマスターちょっと出てまして・・・」
ん、そうなんだ。でもなんか聞いたことがある声だな。

「えっ、比企谷君？」

「・・・雪ノ下さん、お久しぶりです。」
これが私と比企谷君の運命？の再会だった。

「比企谷君、こんなところでなにしてるの？」
他愛のない会話を始める。いつもならすぐ終わらせよう終わらせようとするのだが比企谷君との会話は終わらせたくない。素でいられるのもとても心地よい。

「・・・バイトですよ、大学生も甘くないですね・・・」

ふむふむ、ならここに来れば比企谷君はいるのか。

「いつからここでバイトしてるの？結構来るんだけど初めて会ったよね？」

「えーと、２ヶ月くらい前からですね。

・・・雪ノ下さんが来てる時は裏で作業してました・・・」

「へぇ、それってどういうことかな？」

思った以上に低い声が出てしまった。

だって下手すればもっと早くに会えてたってことだもん、それに比企谷君は気づいてわざと会わないようにしてたってことだし、多少なりとも、いや、結構傷付いた。

「なんか今までと雰囲気が違って近づきづらかったってのもあります。」

へぇ、やっぱり比企谷君は気づいてくれるんだね。

「のもってことは他には？」

そう意地悪で聞いてしまった。だってこんなに久しぶりに会ったのに雰囲気が違うと気づいてくれたのはすごい嬉しいから。

「単にめんどくさかったというか・・・」

前言撤回、最低だ比企谷君。

「おねーさんが困ってる時にめんどくさいってどういうことかな？」

「いや、あの雪ノ下さんがあんなに憂鬱そうにしているなんて絶対に面倒事でしょ」

こーいうところがずるいんだよねぇ、なんでも気づいてくれる。なんでもっていうのはちょっと違うね。気づいて欲しいことに気づいてくれるっていうのがずるい。

「よくわかるねぇ、比企谷君、やっぱり君は面白いよ」

これは紛れもない本心だ。

「まぁ、ありがとうございます。」

これは想定道理だ、ここで一つ爆弾を投下してみよう。

「ところで比企谷君、比企谷君は雪乃ちゃんと付き合ったのかな？それともがはまちゃん？それか一色ちゃんか、大穴でめぐりとか??」

あ～、ここでだれかと付き合ってたら私は失恋しちゃうんだ。と、聞いてから理解してしまった。

こんなことなら聞かなきゃ良かったと後悔してしまう。

すると比企谷君は少し躊躇いながら、

「あの2人とはそーいうんじゃないんですよ・・・、一色や城廻先輩も・・・」

そっか、そうなのか、良かった、初めての恋を諦めなくてよくて良かった。私にもこんな気持ちが残ってたんだってことも凄く嬉しい。こんな気持ちになるのは初めてだな。と考えていると比企谷君が

「雪ノ下さん、どうしてそんなに泣きそうになってるんですか？」

「!?そ、そんなことなってないよ～？どうしたのかなぁ比企谷君？」

とっさに仮面をかぶってしまうが彼にはこの仮面がきかないことに気がついた。

「比企谷君、実はね・・・」

私は今まで両親にも、誰にも伝えたことのなかったほんとの気持ちを比企谷君にぶつけた。

つまらないと思われてもいい。ただ、嘘はつきたくなかった。

「雪ノ下さん、昔は自由気ままで凄く・・・怖いなって思ってたんですけど、今はずいぶんと違いますね。」

あぁ、飽きられちゃったかな、つまらないと思われちゃったかな。涙が零れそうになってしまう。

「そうだよ・・・ホントの私はこんなに弱い。今まで必死に仮面をかぶってきて、誰にも本心を悟られないようにしてきた結果がこれなの。まぁ、比企谷君にはなぜだか最初から仮面なんてきいてなかったけどね。」

ははは、と乾いた笑いがでる。

これで彼に飽きられちゃっておしまいかな。

あぁ、私の初恋はその恋に気づいた途端に終わってしまうのか。今まで嘘ばっかりで生きてきた私に相応しい終わりなのかな。

「俺がなんとかします。」

「えっ？」

彼は今なんて言ったのだろう。

「俺は今まで雪ノ下さんのことはただ怖いとか自由だとかそんな偏見でしか見てなかったです。それで本心を聞いたり、今の雪ノ下さんを見てると、なんだか、えっと、失礼ですけど年下みたいだなって・・・」

私が年下？ふふっ、やっぱり比企谷君は面白ことを言うな～と思いつつ、私は一番伝えたかった事を彼に伝える。

「ねぇ、比企谷君、私を救ってくれないかな？」

「はい。俺に出来ることなら。」

こうして私、雪ノ下陽乃は生まれて初めて人に助けを求めたのだった。

仮面の下は・・・中？

「はい。俺に出来ることなら。」
私は家に帰り部屋にこもりずっとニヤニヤしているだろう。まさか比企谷君からこんなことを言ってくれるだなんて想像もしていなかったからだ。大学に通ってからの比企谷君を私は知らない。そこが嬉しくもあり、少し寂しくもある。私をこんな気持ちにさせる比企谷君には責任をとってもらわないと、と思っていると。

コンコン

不意に扉がノックされる。
私はいつもの仮面をつけ、いつもの様にこう答える。
「はい、陽乃です。」

「陽乃、少しいいかしら？」

そう静かに答えるのは私のお母さんだ。最近はよくこうして私の部屋に来ている。まぁ、ここに来る時の話なんてあの話しか無いんだけど。

「うん、大丈夫だよ。」
こう答えると、いつもは扉越しに用件を伝えるだけなのだが、

ガチャ
と、部屋に入ってきた

「陽乃、あなたも今日で２２歳になったじゃない？
そこで・・・」

嫌な予感しかしない。いつもはこんなことを言わないのに今日はなんだか嫌な感じがする。せっかく比企谷君と再会してこれからが楽しみって感じなのに。やめて、その先は言わないで。

だが、無情にもその一言が口に出された。

「陽乃。今までは付き合いの関係で相手からの申し込みがあった時にお見合いを受けてたんだけど、今回は雪ノ下家から〇〇家にお見合いをおねがいさせて貰ったわ。」

えっ、どういうこと？雪ノ下家からの申し込みってこと？それは私に断るの選択肢が無いということ、それに加えてわざとへんな態度をとり、相手に嫌われるということも雪ノ下家の名前がある限りそんなへんなことは出来ないだろう。なぜ？なんでこんな急にこんな話になったの・・・と、しばらく黙り込んでいると、

「あなたももう２２歳になったのだし、私達もこれでも待ったのよ？あなたが気になっている人がいるとかそうやって言うこともあればこんなことにもしなかったのだし。

私達も陽乃にそのような相手がいないって判断してこのお見合いを設けたの。

もしも、そのような相手がいるのだったら白紙にもどすこともできるのよ。ただ、その相手をちゃんと雪ノ下家にお招きして、みんなに紹介してちょうだい。」

「それ、は・・・」

私はなにも言えなかった。比企谷君にこんな迷惑をかけたくなかった。

「それでは明後日、陽乃。よろしく頼みますよ。」

「はい、わかりました・・・」
お母さんが出ていった後私はその場に崩れ落ちる。
結局私は怖かったのだ。今まで付けてきた仮面を外すことが。こんな私が幸せになれるはずなんて無かったんだ。
不意に涙が零れる。私が覚えている中では初めての涙だ。仮面を付けてから涙なんて流したことが無かったのに。本当の私はこんなにも弱いのだ。弱い私を必死に守るために私は仮面を手に入れたのだった。こんな仮面をなくした私を誰が必要としてくれるのだろう。いや、誰もいないだろう。これが本心を隠し、守り続けてきた私の本当の姿だ。
こんな私の姿を見て比企谷君はどう思うのだろう。呆れるのだろうか、嘲笑うのだろうか。あぁ、怖いなぁ。
私はそのまま泣きつかれ眠ってしまったのだった。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「コーヒーおねがい。」
私はお見合いの前日またあのお気に入りの喫茶店に来ていた。多分ここに来るのも、比企谷君と会うのもこれで最後だろう。そう決めていた。

「・・・雪ノ下さん、どうしたんですか?・」
ふふっ、なんでこんなに鋭いんだろうね、比企谷君は

「ううん、なんでもないよ?・どうしたのかなぁ、比企谷君。お姉さんが心配なのかな～?・」
いつもの様に仮面をつけて話を濁す。今にも涙が零れてしまいそうだ。だが、張り付いた仮面にはそんな素振りは一つもない。いつもの笑顔だ。

「はい。心配です。だって、雪ノ下さん・・・・・・泣いてるじゃないですか。」
っ！この一言を聞いた瞬間私の１５年以上付けてきた仮面なんか何の役にもなく剥がれ落ちた。
涙がどんどん溢れてくる。まるで今まで我慢してきた涙がいっせいに溢れ出しているようだった。

「・・・雪ノ下さん、俺じゃ力になれないですか？」
優しい比企谷君の言葉で私はまたこう言ってしまう。

「比企谷君、助けて欲しいの。」

比企谷君はまたこう言うのだった。

「はい。俺に出来ることなら。」

そして私は彼に全てを伝えたのだった。
私がお見合いをさせられることを、それを助けて欲しいことを。

「雪ノ下さん、全て捨てましょう。嫌ですか？
すみませんけど自分にはそういうやり方しかできないです。」

「ううん、嫌じゃないよ。こうなったのも私が原因だしね、どうしてくれるの？」
私は彼に期待してこう聞いたのだった。すると彼からはこんな思いがけない一言が。

「雪ノ下さん、明日のお見合い、行ってください。」
えっ？彼はなんて言ったのだろう。

「えっ、比企谷君？それ本気??」

私は期待を込めてこう聞く。

「はい。雪ノ下さんはお見合いを受けてください。
雪ノ下さんの話を聞く限りどちらの両親も参加するそうですし、そのお見合いは受けるしかないと思います。」

「それで、私は嫌われるようにすればいいの？」

「いえ、普通に楽しそうにお見合いをしてくれればいいです。」
彼は何を言っているのだろう。私を助けてくれるのでは無いのだろうか。彼の考えていることがわからない。

「それで、私は何もしなくていいの？」
これで最後だと、彼に聞く。

「はい。何も無いです。」
ここに比企谷君の無情な一言。私は頭が真っ白になって喫茶店から飛び出してしまった。彼に期待した私がダメだったのか？いや、絶対ダメじゃないはずだ、じゃあなぜ？考えがまとまらない。なにも考えがまとまらないうちに家に着いてしまった。今比企谷君に連絡をとろうと思ったが怖くてできなかった。そのうち比企谷君の方から連絡が来るだろうと思っていたがどれだけ待っても連絡がくることは無かった。
こうして私はお見合いの日を迎えてしまったのだった。

仮面の下は・・・下

当日になっても彼から連絡がくることは無かった。
あぁ、やっぱり私は呆れられたのかな。でも、それでも私は一縷の望みをと彼に電話をかける。だが、比企谷君は出ない。メールも送ってみたのだが相変わらず返信は来ていない。私は涙が止まらなかった。これも全て私がしてきたことのせいだというのはわかっている。わかっているけれどもとても悲しかった。
そして、お見合いの始まる2時間前、私はお母さんに電話をかけたのだ。だが、お母さんも電話に出る事は無かった。このお見合いの話を無かったことにして欲しく、他になんの条件を出されてもいいから断ってもらうつもりだった。だが、現実はそんなに甘くはなかったのだ。
そこでふと私はこう思うのだった。
そうだ、これから死ぬまで一生この仮面をかぶり続ければいいじゃないか。
私は今までそれで大丈夫だったし。これからも大丈夫だ。
そんなに難しい話じゃ無いじゃないか。
あんな男の子1人の言葉に惑わされてなにを勘違いしていたのだろう。私は雪ノ下家の長女である雪ノ下陽乃だ。生まれた時から自由など無かったんだ。と・・・
そう考えることで私の気持ちはとても軽くなった。
自分の気持ちを殺すとはまた違うものだ。
私は他の女の子達とは違うんだ。もちろん雪乃ちゃんとも。私に自由なんて言葉は似合わない。
私は今の私を強要されているんだ。だからそれを壊すわけにはいかない。自分の中からスッとなにかが抜け落ちたような気がした。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「本日はよろしくおねがい致します。」

いつもと変わらない挨拶。いつもと違うのは私から挨拶をしているくらいだ。
隣の母はなぜだか機嫌がいいようだ。それが私をイラつかせる。
なぜだか怖いくらい笑顔の母は終始なにも口出しをしてこない。母が組んだお見合いなのだからなにかあるのではと踏んでいたのだがとんだ興ざめである。このお見合いが嘘のようにトントン拍子で進んでいき。私はようやくことの重要性に気づいた。
ここでこんなに上手くいってしまったらまるで母の手の上で転がされているようではないか。それはいけないと思い少しお花を摘みに言ってくると伝え、その場を後にする。
休憩室で1人、冷静になり考えてみる。
思うことはただ一つ。⊠こわい⊠だ。
こんなたかが1時間食事した相手と私は結婚をし、パーティーなどで幸せな生活を送っているように見せ、そう伝え無ければならないのか。
・・・私はまだまだ子供だ。仮面をつけているせいでここにくるまでにとても多くのモノを落としてきてしまっている。そんなことに今更気がつくのも全て比企谷君に再会したからだろう。
気がつくと私は比企谷君に電話をかけていた。
ピロリーン
すると音は同じ休憩室から聞こえるではないか。
どうして？なぜ？と考えていると、そこの音が近づいてくる。
「雪ノ下さん、いえ、・・・陽乃さん。
お待たせしました。」
えっ、比企谷君は今なんて言ったのだろう。
比企谷君は何をしてくれるのだろう。
でもダメ、もうお見合いは始まってしまっているのだ。

「・・・ごめん、比企谷君。もう手遅れなんだよ・・・。」

ホントは嬉しかった。でも、どうしようもないのだ。

「陽乃さん。逃げるんですか？」

この言葉がとても胸に刺さる。

そうだ、私は今までずっと逃げてきたのだ。そうすることでしか私は私を守れない。私は弱い。だから他人を傷つけ、信用出来ない。

「私は雪ノ下家の長女なの！そんな自由があるわけないでしょ！」

私は比企谷君に向かって初めて怒鳴ってしまった。

でもこれが紛れもない真実である。

私は他の子のように普通じゃないの。だから、初めから自由なんてなかった。

「陽乃さん。何言ってるんですか。

陽乃さんも、普通の女の子ですよ。」

っ！どうして比企谷君はこんなに言って欲しいことがわかるのだろうか。

「陽乃さんは普通の女の子です。・・・いえ、普通の女の子よりも全然弱いです。怖がりです。だから誰にも嫌われないように仮面をかぶってる。

俺は最初その仮面を見た時とても怖いと思ってました。雪ノ下をもってまでして敵わないと、あいつがあんなに劣等感を持つぐらいの凄い人だと。ただ、何回も会ううちに陽乃さんの考えていることが少し、わかるようになったんです。俺は人から嫌われるのに慣れていて、傷つけられるのにも慣れていて。それが嫌で。そうありたくな

いって思ってました。このことが陽乃さんからも伝わったんです。昔はなんとなくだったんですけど再会してからは確信になりました。」

比企谷君の言ってる事は凄いなぁ。全部当たってるや。
でもどうする。この状況は変わらないのだ。
もうお見合いも終盤だろう。
そろそろ時間的に戻らないといけない。
私は比企谷君と一緒になりたい。でも母は許さないだろう。

「でもね。比企谷君。もう手遅れなんだよ・・・」

「・・・言ったじゃないですか。お待たせしましたって。」

「どーいうこと?」

「それは戻ればわかることです。ただ一つ。陽乃さんには頑張って貰いますが大丈夫ですか?」

「・・・うん。わかった。私はもう逃げないよ。」

「・・・それでは、行きましょう。」

そう言って彼から初めて手が差し出された。
私はとても嬉しく仮面の無い心からの笑顔で彼の手をつなぐ。こんなことで比企谷君は顔が赤くなっていて、とても可愛いと思ってしまった。さっきまではあんなに頼もしいと思ったていたのに。ホントに比企谷君は最高だなぁ♪

「比企谷君。顔が真っ赤だよ?可愛い。」
私は思ったことを正直に伝えた。

「・・・何言ってるんですか。陽乃さんも真っ赤じゃないですか。」

えっ?と思い私は鏡で顔を確認する。すると今まで見たことが無いくらい顔がゆるみきって真っ赤になっていた。こんな乙女な顔をした私を見たことがなかった。

あぁ、私はこんなに彼のことが好きなんだ。と、産まれて初めての恋に驚くことばかりだ。

こうして私は比企谷君と手を繋いで、お母さんの元へ、お見合い場へ向かったのだった。

扉の前までつくまでは良かった。ただ今は怖い。私はなにを伝えればいいのだろう。私は・・・手が震えている。手を繋いでいるので比企谷君にもバレているだろう。すると比企谷君はキュッと握っている手にすこしだけ力を込めて

「陽乃さん大丈夫です。俺がいますから。」

彼は普段絶対こんな事は言わないはずなのに。比企谷君は比企谷君なりに頑張ってくれてるのだ。私はそれに答えたい。

扉を開くとそこには冷たい目をした母がこちらをみている。怖い怖い。今にも逃げ出してしまいたいくらいだ。

だが、もう逃げたくな無いのだ。

「あの、おかあ・・・」

「陽乃。どういうつもりかしら」

やはりこうなるのだ。私はやっぱり仮面をとる事はできないのだろうか・・・するとまた比企谷君がギュッと手を握ってくれる。そうだ。私は変わるためにここに来たのだ。

「ごめんなさい。お母さん。

でも私はもう逃げたくないの!このお見合いは悪いけどなかったことに出来ないかな。私は彼が好き。比企谷君が誰よりも好きなの

！比企谷君は私の私ですら気付いてなかったことに気づいてくれて。私がどう進むべきかの道を示してくれたの。だから・・・私は比企谷君以外の人と結婚なんてしたくない！」

言った。産まれて初めてお母さんに反抗した。今までずっと言う事を聞いてきた。こんな私をみてお母さんはどんな顔をしているのだろう。悲しんでいるのかな。怒っているのかな。怖いけど向き合うしか無いのだ。そうして母の方を見るとなんと母はとても笑顔だった。

「陽乃。やっと本心を言ってくれましたね。」

えっ？今なんて・・・

「昨日の夜に隣の比企谷さんと雪乃ちゃんが私のとこにきてね。明日の陽乃のお見合いを無しにしてくれって直談判しに来たの。最初はそのままお帰り願ったんだけどどうしてもこれだけは譲れないって比企谷さんが。

陽乃のためにどうしてそんなことをするのか聞いたらね。守りたいんですって。

でも私もはいそうですかでなしに出来る訳じゃないの。だから彼には陽乃の責任をとってもらうこと、そして雪ノ下家に入ってもらう試験をしたの。」

「比企谷君！雪ノ下家に入るってどーいうこと!?」

「陽乃さんを守れるならそれくらいどうってこと無いですよ。」

「・・・どうして勝手にそこまでしてくれるの・・・」

涙を止めることなどできなかった。

「それでね、このお見合いが始まる直前まで雪ノ下家の仕事をしてもらって無事に、いえ、予想以上の成果を残して合格だったわ。今すぐにでも雪ノ下家に入って欲しいくらいにね。」

だからどちらとも連絡が取れなかったのか。

「・・・ちょっと、それは言わない約束じゃ無かったですかね・・・。」

「あら?そうだったかしら?」

ふふっ、こんな時なのに、涙が止まらないのに笑ってしまった。

「それじゃ、このお見合いは?」

私が一番気になっていることを聞いてみる。

「そんなのただのお食事会よ?」

平然な顔で答えるお母さん。だから挨拶とかしなかったのか・・・

「ねぇ、比企谷君。ほんとにありがとう。

それでね。言いたいことがあるんだけどいいかな?」

「いえ、俺は聞きたくないです。」

えっ、どういうことだろう。私の話を聞きたくないって、つまりそういうこと・・・

私ばっかり舞い上がってたのかな。比企谷君も同じ気持ちでいてくれたのだと思ってたのはどうやら私の思い違いだったようだ。比企谷君にとって今回の事は奉仕部の延長線上だったのかもしれない。先程までとは違う涙が溢れてくる。急いでその場を立ち去ろうと走り出すが比企谷君が私の手を掴む。

「比企谷君はなして!」

「陽乃さん!俺の話を聞いてください!」

「嫌だ!絶対に、絶対に聞きたくない!」

するとグッと引っ張られギュッと比企谷君に抱きしめられた。そして

「陽乃さん。好きです。俺と結婚して下さい。」

この一言。

「えっ、どういうこと・・・」

彼は私の気持ちを聞きたくないと言った。なのになぜ私は比企谷君にプロポーズされているのだろう。

これはどういうことなのだろう。頭が真っ白で何も考えられない。

「あー、あれですよ。陽乃さんに言われる前に俺からいいたかったんです。」

と、頭をがガシガシと掻きながら比企谷君はそういう。

そうか私達は両想いなんだ。嬉しいなぁ。今までこんなに嬉しかったことなんてない。これが幸せってことなんだね。比企谷君、私のいろんな初めてを奪ってくれた人。そして私の一番愛しい人。

「・・・あのー、なにか言ってもらえませんですかね・・・」

おっといけない、返事もなにもして無かったか。

「比企谷君。いえ、あなた！

不束者ですが末永くよろしくお願いしますっ！」

私は飛びっきりの笑顔でそう言った。

それを聞いてお母さんも

「はぁ、陽乃のこんな顔初めて見たわ。

比企谷さん。これから陽乃のことも、雪ノ下家のことも、どちらと

もよろしくお願いしますよ?」
よかった。私達のことを認めてくれるんだ。
ほんとに良かった。

「・・・わかりました。」
あなた、目が腐ってきてるよ。と思いながらも彼にギュッと抱きつきこう伝えるのだった。

「比企谷君大好き!こんな私を選んでほんとにほんとにありがとう!」

「いえ、俺の方こそありがとうございます。」
んもう、なんだか他人行儀だなぁ。これから結婚するのに。そうだ、こうしてやろう!
彼の腕を引っ張り低くなった唇に自分の唇を重ねる。
ほんの数秒が何時間にも感じられるくらい幸せだった。
顔を真っ赤にさせている彼に同じく真っ赤になっている私がこう伝えるのだった。

「私を素敵なお嫁さんにしてね!
2人で幸せになろうね!」

川崎沙希の初恋はやはり間違っている

「ねぇ、比企谷」

終業式の後、教室でいつものようステルスヒッキーを発動していた俺に誰かが声をかけてくる。・・・えーと、川、川、川なんとかさんだ。えーと、なんだっけ・・・

「なに?無視してんの?あんたに話しかけてんだけど?」

やだ、怖い!八幡かつあげされちゃうの?

そんなことを考えていると川なんとかさんがジトっと睨みつけてきている。

嫌々ながらこれ以上名前を考えても出てきそうにないので応答することにした。

「んで、なんか用なのか?」

「ちょっとここじゃ話しづらいからちょっと階段の踊り場まで来てくんない?」

やだやだやだこれ確実にかつあげコースじゃ無いですか。ドキがムネムネしながら川なんとかさんの後ろを5歩ほど離れてついて行く。

「ここまできたらいいでしょ。」

なにがいいんだ?ここなら人目を気にせずかつあげできるってこと??てかほんとに怖いんだけど・・・

「あのさ、今度たいし達のオープンハイスクールがあるんだけどさ」

それは知っている。なぜなら小町もオープンハイスクールだからな！と、なぞのドヤ顔を心の中で決めていると

「その日ちょうど私用事があってさ、両親も仕事だし、それでね、頼みづらいことなんだけど、もし、その日暇だったらけーちゃんの面倒を見てもらいたいんだけど大丈夫？」

夏休みのその日は暇、というか夏休みは全部暇だから大丈夫っちゃ大丈夫なんだがなぁ、と考えていると

「けーちゃんもあんたに会いたがってたしちょうどいいかなって、こんなこと頼めるのもあんたぐらいしかいないからさ。」

そんなしょんぼりした顔で頼まれると断れる筈もないし、俺もけーちゃんに会いたかったのでこのお願いを受けることにしたのだ。

「わかったよ、けーちゃんの頼みなら断れる訳もないしな。」

「・・・ロリコン」

「俺はロリコンじゃねーよ・・・」

「とりあえずありがとね、比企谷。」

「おう」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

けーちゃんを面倒見るのは俺の家でいいと伝えたのだがお昼を挟むので私の家で面倒を見て、家にある食材はなんでも使っていいからお昼を食べさせてあげて欲しいと頼まれた。

ピンポーン

「よう」

「今日はありがとね、これから私出かけなきゃならないからけーちゃんのことよろしくね」

「はーちゃん、今日は1日よろしくお願いします！」

「俺もちょうどけーちゃんに会いたい頃だったしな。

けーちゃんも礼儀正しいな、正直驚いたぞ」

前にあった頃ははーちゃんはーちゃんと抱きついてくるだけだったのに随分と成長したんだなと関心してると

「これはねー、さーちゃんにこう言えって言われたのー！

あんまりはーちゃんに変なとこは見せたくないって！」

あぁ、なるほどそーいうことか。

どうりで前から半年もたってないのに急に成長したと思った。

「けっ、けーちゃん！そんな事は言わなくていいの！」

そうだ、思い出しだ。川崎沙希だ。けーちゃんがさーちゃんと読んだことで思い出すことが出来た。

「それで川崎、時間は大丈夫なのか？」

「あっ、そろそろ急がなきゃ。

それじゃ比企谷、頼んだよ。

・・・くれぐれもけーちゃんに変なことしないでね。」

「・・・わかってるよ、なにもしねーよ。

それじゃ川崎、いってらっしゃい。」

すると川崎は顔を真っ赤にさせながら

「っ、・・・それじゃ、行ってくるね

けーちゃんもいい子にしてるんだよ。」

「あっ、さーちゃん照れてる！」

「けーちゃん！余計な事は言わなくていいから！」

こうして俺とけーちゃんのお留守番が始まるのだった。

鶴の想い人　1

私はあのクリスマス会から気になっている人がいる。
いや、厳密に言えばあの林間学校の時からだ。

あの人は一人ぼっちでいた私を壊れ物に触れるように扱う先生達とは全く違った。
先生達は無理にでも私を皆の輪の中に入れようとした、でもそれは全くの逆効果である。
いきなり入ってくる私を皆は警戒しより離れていく、
そんなのは小学生でも分かることだ、でも学校の世間体などを気にする先生達はお構いなどしてくれない。

でも、あの人は違った。あの人は無理矢理仲良しこよしをさせるのではなく、人間関係のリセットを選択した。
そのせいで？お陰で？なのかわからないけど、林間学校でのメンバーはもう元通りのグループで過ごす事は無くなった。
でもその時私が助けた女の子と2人で学校生活を過ごしている。
その子もグループの中で、嫌われることを怖がって、いじめられないように日々過ごしていたという。
つまり少なくとも、私もその子もあの人に助けられたと言うことだ。そう、八幡に・・・

それからの私は学校に向かう時、授業を聞いている時、放課後の図書室で本を読んでいる時、そんなふとした時に私は八幡の事を考えるようになっていた。

クリスマス会で八幡と再開した時私は落ち着いて冷静な感じで対応していたが内心とても嬉しかった。
また会えると思ってなかったから。

八幡はまた変な屁理屈を言って私に元気をくれた、でもこのクリスマス会で私は八幡が秘かに人気があるという事を実感してしまった。

前の林間学校の時は私に似た雰囲気の綺麗な先輩とお団子頭の可愛らしい先輩の2人がもしかしたら？って感じだったんだけど、クリスマス会の時にはもう確信に変わっていった。それだけじゃなく亜麻色の髪の色をした可愛らしい人までもが増えていた。その人、一色先輩が八幡にちょっかいをかける度に私の胸はズキズキ痛んだ。

これが私の初恋だ。多分ずっと前から好きだったのだろう。ただ、今までこんな経験は無かったので気づくまでとても長い間がかかってしまった。

元々高校生と小学生と無理がある2人なんだ。これから私が自分から行かなきゃ！

そう決心した。

「ふぁ～、今日も学校かぁ。」

しかし決心したはいいがどう行動すれば良いかが全くわからない。如何せん、高校生と小学生なのだ、難易度が高すぎる。

共通点が全く無いので会うことすらままならない。

唯一わかる事は八幡が総武高校ということだけだ。

そうして何日、何週間たって私は少しずつ焦り始めた。このままなにも行動しないと八幡があの3人に取られてしまう。それどころかさらに人数が増えているかもしれない。そうして私は総武高校に単身乗り込むことを決意し、今、総武高校の門の前に立つのだった。